

昨年あたりから幾度となく I C T という文字を見るようになった。I C T 単独よりは、I C T 教育という言葉で使われている。I C T とは、「情報通信技術」のことである。

ここ 1 年という短い期間で、生徒の机の上には、タブレット型端末が置かれるようになった。どの学校でもそうだが、I C T に詳しい先生方がそろっているわけではないだろう。たいていの場合は、その道の知識とスキルをもった推進役を務める先生が、リーダーシップを発揮しながら進めてくれている。

本校での推進役は、H T 先生となる。他にも授業でタブレットや大型画面モニターを使う先生は増えてきた。頼もしい限りである。生徒会総会や出前講座等をリモート配信したり、生徒が家庭にいながらリモート授業を受けることができるようになったり、生徒にアンケートを実施し、瞬く間に集計が終わっていたりするのには、すべて H T 先生の手腕によるところが大きい。

これはこれでいいのだが、もし H T 先生がいなかったらどうであろう。本校は、きっと機能停止に陥る。ここが弱点である。H T 先生に頼りっぱなし、任せっきりではいけない。何事も組織的にチームで動かなければならない。

そこで、本校の「情報教育 I C T」担当チームのメンバーを確認したところ、H T 先生以外は、各学年から 1 名ずつ、それも見事に 2 0 代の若手が配置されていた。そもそも本校には、2 0 代の職員が、この 3 名しかいない。ある意味、精鋭部隊である。

ここには当然、S S 先生も H 先生も入っている。それはいいのだが、以前から気になっていることがあった。歳が近いはずの S S 先生と H 先生のコミュニケーションが少ないという点である。所属学年が違うため、そうになってしまう傾向があることは理解できる。

だが、それだけではあるまい。私なりに分析してみた。パソコンのキーボードに向かっていると、会話は少なくなる。大勢のベテランの中であって、若手が伸び伸びできずに会話が少ない。そもそも二人ともおしゃべりなタイプではない。

これでは、せっかくの 2 0 代がもったいない。若い者同士で学び合うこともあるだろう。そこで、こちらから仕掛けることにした。二人に宿題を 2 つ出した。H T 先生がいなくとも、本校における最低限の I C T 教育が維持できるようにすること。もう一つが、若手同士がアイデアを出し合い、もっとこんなことはできないかという提案をすることである。

すると、早速、H 先生がタブレットを操作しながら、S S 先生と相談を始めた。しめしめ、これでよい。2 年目の H 先生と 1 年目の S S 先生なら、魅力的なアイデアを出してくれるかもしれない。二人だからこそ、柔軟な思考で、本校の I C T 教育をさらに進めてくれるかもしれない。

そして、目指すのは、I C T のプロである H T 先生と若手 2 人の融合である。H T 先生もそれを望んでいるのではなかろうか。いつぞやは、タブレットを活用した H T 先生の道徳の授業を S S 先生が熱心に参観していた。その様子を私が内心ニヤニヤしながら、頼もしく感じながら見ているわけである。

きっと H T 先生は、若手の台頭を待ち望んでいるはずである。若手がどこまでやってくれるか非常に楽しみである。